The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近世・近代における引用・卓立を示す補助符号についての通時的研究一外来語に付される符号を中心に一
Author(s)	藤本, 能史
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96164
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　藤本　能史　）	
論文題名	近世・近代における引用・卓立を示す補助符号についての通時的研究 ―外来語に付される符号を中心に―

論文内容の要旨

補助符号は、文章をより読みやすく、また文意が伝わりやすくするために用いられる文字以外の記号の総称である。その中で、引用・卓立を示す場合は、傍線や括弧が使用される。ここに言う引用・卓立とは、「漢字仮名交じり文における分節から、注目すべき語句の強調に至るまでの広い範囲を指す」ものである。こうした補助符号を用いる目的は、従来の表記形式では読解に不便な側面があり、それを補うためであると考えられる。つまり、補助符号の変遷は、国語文字・表記の変遷と直接的に関係しているのである。そのため、補助符号史の研究は、国語研究において重要な位置を占めていると考えられる。

幕末・明治期になると、外来語の纏まり・種類（地名・人名・官名など）を標示する目的で補助符号が使用されるようになることが、夙に指摘されている。小林(1982)は、外国地名に右複線、外国人名に右単線を付す形式が、明治期一般の表記スタイルとなると述べている。また深澤(2004)、(2006)は、明治期の外来語に付される補助符号の展開・消長について論じており、片仮名表記外来語に付される補助符号の衰退は、漢字片仮名交じり文から漢字平仮名交じり文への表記体の移行が要因であると指摘している。表記体の移行により、「てにをは」と混同する可能性が減り、文字列単独で区別が可能になったことで、符号を付す必要性が希薄化したと述べている。幕末・明治期は、文明開化の影響により数多の外来語が流入した時期であり、小林氏の指摘する補助符号を付した表記形式の定着と関係がありそうだが、定着の要因については検討がされていない。また、深澤氏の諸研究は、片仮名表記外来語を中心に検討が行われているが、符号が漢字表記外来語にも付されていることに鑑みると、符号の展開を記述するためには、仮名表記・漢字表記両方の使用状況を調査し、比較する必要があると考えられる。

また、外来語に補助符号が付される早い例として、大熊(1995)は、建部清庵・杉田玄白『和蘭医事問答』(1795)を挙げている。しかし、どのような経緯で外来語に符号を付す形式が採られるようになったかは言及がなく、『和蘭医事問答』以降の具体的な展開も示されていない。そのため、近世期の諸資料を調査・検討することで、外来語に補助符号が付されるようになった要因や、近代の表記形式との連続性を明らかにする必要がある。

以上の問題意識のもと、近世・近代における補助符号、特に外来語に付される符号の史的変遷について論じるのが本論文の目的である。

本論に入る前に、序章第2節で補助符号に関する先行研究の概観、第3節で近世以前の分節形式を概観し、本論への導入とした。

第1部　近世期資料における補助符号の史的変遷

第1章　近世前期版本医学書における引用・卓立を示す補助符号の使用実態

本章では、近世前期（『和蘭医事問答』より前である慶長元年(1596)～天明9年(1789)の期間）版本医学書を対象とし、商業出版が隆盛し、製作者の書記効率より、読者にとっての読みやすさが重視されるようになった近世期において、どのような形式で文や特殊な語句の引用・卓立を行っていたのか調査を行った。当時の医学書は、大きく漢方・蘭方の二種に分類されるため、それぞれに対して分析を行った。分析の結果、まず漢方医学書においては、合符や句読点など、語の纏まりや文の切れ目を示す補助符号は多くの資料で使用されていたが、引用・卓立を示す補助符号は和刻本漢籍など、ごく一部の資料に限られていることを指摘した。中には、竹中通庵のように多様な補助符号を駆使し、重要箇所を読者に明示するような例も確認でき、著者によって傾向が異なるが、概ね読者にとって読解を平易にする目的で符号が使用されていることを明らかにした。漢字平仮名交じり文においては、資料内容が平易であること、及び矢田氏が指摘する漢字仮名交じり文が有する分節機能により、句読点以外の符号が使用されなかったことを指摘した。一方、蘭方医学書においては、『蘭学階梯』『和蘭医事問答』以降、表記体に関係なく、外来語の卓立に鉤括弧が伝統的に使用されるようになったという仮説を得た。

第2章　近世期蘭学資料における引用・卓立を示す補助符号の使用実態

前章で得た仮説を立証するために、近世期（ここでは慶長元年(1596)～慶応4年(1868)とする）の蘭学資料を対象として、引用・卓立を示す補助符号、特に鉤括弧と傍線の使用実態を調査した。前野蘭化のように、著訳書がすべて写本の状態で残されているという場合があるので、版本だけでなく写本の資料も調査対象とした。調査の結果、外来語を括る鉤括弧は、『紅毛雑話』『蘭学階梯』など18世紀後期頃から確認できるが、これらは前野蘭化外来語を区切る目的で鉤画を応用し、その方法を蘭化以降の蘭学者も使用した可能性を指摘した。傍線は、外来語に付す場合、①外来語に右単線、②外国人名に右単線・外国地名に右複線、③外国人名に右単線・外国地名に左単線の三通りが確認できた。使用については個別的事情が現れやすく、資料間の関連性が見出しがたく、資料に共通の規則性は確立していなかったことを示した。外来語に付される符号として、鉤括弧・傍線の二種類が確認できるが、小林(1982)が明治期一般の表記形式と指摘する、外国地名に右複線・外国人名に右単線を付す形式は、近世期の資料においては確立していなかったといえる。

第2部　近代の資料における外来語に付される補助符号の展開

第3章　幕末・明治初期における外来語に付される傍線の使用実態について―後期漢訳洋書との比較―

小林氏は、外国地名に右複線、外国人名に右単線を付す表記形式の嚆矢を、『官板バタビヤ新聞』(1862)まで遡るとしており、定着要因を探るためには、前後の資料及び関連資料を調査する必要があると考えられる。そこで本章では、後期漢訳洋書及び、幕末・明治初期に発行された新聞を調査し、小林氏が指摘する、傍線を用いた表記形式の定着要因について検討を行った。調査の結果、後期漢訳洋書では、人名に右単線、地名に右複線が付される形式が基本的な表記形式であり、また複線の形状は長方形（▯）が基本であることを指摘した。一方、幕末・明治初期の本邦新聞では、『官板バタビヤ新聞』以降、人名右単線・地名右複線・官名左複線・その他左単線という表記形式が行われた。これには、蕃書調所関係者である柳河春三が大きく影響していると考えられる。また、官名がその他の名詞から独立しているのは、『官板バタビヤ新聞』において様々な官名が使用されている点が要因であると考えられる。明治期以降の新聞以外の資料56点において調査を行うと、人名は右単線32点と、過半数を占めていた。地名は右複線・鉤括弧が同数（13点）であり、傍線の中では最も多いものの、次点の左単線（11点）との差は僅かである。官名・その他の名詞は、鉤括弧（それぞれ14点、33点）が最も多く、傍線全体の資料数を合計しても（それぞれ14点、21点）、鉤括弧の資料数以下であった。この結果より、新聞以外の資料では、新聞と同様の表記形式を採った資料は少なく、影響関係は小さい。後期漢訳洋書が、幕末・明治初期の知識人階層に広く読まれる中で、傍線の用法も応用したのであると指摘した。

第4章　明治・大正期における外来語に付される補助符号について―表記形式ごとの使用状況の比較を中心に―

本章では、明治・大正期の諸資料を対象とし、漢字表記・仮名表記外来語それぞれにおける、符号使用状況の経年的な変化の実態を調査し、違いが生じた要因を考察した。調査の結果、まず仮名表記外来語の場合、漢字片仮名交じり文では仮名替え無しの資料が多く、漢字平仮名交じり文では仮名替え有りの資料が多いことが分かった。仮名替えとは、地の文と外来語において、異なる仮名が使用されることを指す。この点から、表記体の移行及び外来語片仮名表記への固定化が、補助符号衰退の主たる要因であることを明らかにした。一方、漢字表記外来語は、仮名表記より符号の衰退時期が早い。これは、仮名表記と比較して、漢字表記は文字列単独で語のまとまりが区別しやすく、補助符号を付す必要性が薄い点が要因であると指摘した。地名非略称表記（「欧羅巴」「英吉利」など）・略称表記（「欧」「英」など）を比較すると、略称表記の方がやや符号付記率が低い。明治期には略称の方が一般の人々に理解され、浸透するようになったため、符号を付す必要性が薄まったのだと指摘した。また、外来語の主要な表記形式が漢字表記から仮名表記へ移行し、その上で漢字表記される語が一般に認知される語に限られるようになったために、漢字表記に符号を付す必要性が失われたことを示した。

以上、2部4章の論考を通して、外来語に符号を付す表記形式の成立から衰退までの流れを一通り記述した。様々な資料の関係性や、表記体・表記形式の変化等と関連させて論じることで、外来語に付される補助符号の国語文字・表記史における位置づけを示すことができたのではないかと考えられる。

今後の課題としては、外来語に付される符号としては、振り仮名との関係も考察していく必要があると考えられる。また、引用・卓立を示す補助符号補助符号全体に関わる問題としては、①国語学関連資料など本論文で扱った分野以外の使用状況も調査・記述すること、②傍線・括弧など個別の用法についてその起源や展開を調査すること、③「鉤括弧」という術語の語誌などが、今後の課題として挙げられる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　藤本　能史　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主 査　大阪大学　教授　岡島　昭浩 副 査　大阪大学　教授　岸本　恵実 副 査　大阪大学　准教授　北﨑　勇帆

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　近世・近代における引用・卓立を示す補助符号についての通時的研究
―外来語に付される符号を中心に―

学位申請者　藤本　能史

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　岡島　昭浩
副査　大阪大学教授　　岸本　恵実
副査　大阪大学准教授　　北﨑　勇帆

【論文内容の要旨】

本申請論文は、日本語を表記する際における文字以外の要素のうち、傍線・傍点・鉤括弧といった符号について、外来語に付されるものを中心に、これを日本語表記における分節機能と関連させて研究したものである。

序章では、本論文の対象とする問題の提示を行っている。鉤括弧・傍線など補助符号の機能について先行研究を確認した後に、日本語表記に於ける分節機能について、字の大きさ、連綿、仮名の違いによる使いわけ（仮名文字遣）と補助符号を用いた分節表示を概観して、本論文における中心を、近世期以降に置くこと、また、版本のように大量に提供される書籍を対象として行うことを宣言する。

第一部の第一章では、近世前期医学書における補助符号の使用実態について調査を行い、和刻本漢籍などに引用卓立を示す補助符号が見られたものの、漢字平仮名交じり文の資料では、句読点以外の補助符号が見られなかったことを示した。第二章では、近世期蘭学資料を対象として調査を行い、外来語を括る鉤括弧は一八世紀後期頃から確認でき、傍線も見られるようになるが、傍線の位置や形状と、付される文字列の性格については、共通の規則性は確立していなかったことを示した。

第二部となる第三章では近代を中心とした調査を行うために、後期漢訳洋書と呼ばれる資料や新聞に現れた補助符号の調査を行っている。「人名に右単線、地名に右複線」という漢訳洋書における使われ方と、『官板バタビヤ新聞』などの幕末・明治初期の本邦新聞での、「人名右単線・地名右複線・官名左複線・その他左単線」という表記形式との関係を示した。第四章では、明治・大正期の諸資料を対象として、漢字表記外来語・仮名表記外来語それぞれにおける、符号使用状況の経年的な変化の実態を調査し、違いが生じた要因を考察した。仮名表記外来語の場合、漢字平仮名交じり文では外来語を片仮名で表記する資料が、漢字片仮名交じり文で外来語を平仮名表記する資料と比べて多くあり、先行研究が指摘する表記体の移行に加え、外来語片仮名表記への固定化が、補助符号衰退の主たる要因であることを明らかにした。

また、資料編として、調査資料の凡例（附言・小引など）のうち、補助符号を付す基準が記されていたものについて、これを集めてある。

【論文審査の結果の要旨】

本論文が対象としている符号について、外来語に付されるものを中心に考察を行うことになったのは、外来語をその他の語と区別して示す必要性が生じたことが背景にある。つまり、外来語を表記する際には、表音文字である仮名を用いることがあり、近世期までに確立していた、自立語の語幹部分を漢字で書き、語尾の部分や付属語を仮名で書くという表記形式の中にそのまま収めると、語尾や付属語の部分との境目が分かりづらくなった。そのため、符号を使うことによって境目を見やすくすることが行われるようになったのである。一方で、中国においては（また日本でも）、全て漢字で文章が書かれる中に、地名・人名や外来語が漢字で書かれ、ここでも文の切れ目が分かりにくいところを、漢字表記された地名・人名・外来語に補助符号を施すことによって、どの部分が地名・人名・外来語であるのかを示すことがあった。

上記のような補助符号は、書籍を入手した読者が、書籍に書き入れるもの、すなわち「朱引」としては、古くからあったが、印刷される書物に、当初から補助記号を施した形で印刷されることが、後世、あらわれる。従来の研究では、読者による朱引と、本を提供する側によって付される補助符号を、十分に切り分けずにいたところを、本論文においては、本を提供する側による補助符号という観点から、多くの書籍の調査を行い、成果を示したものである。本論文の序章などで、上記のような問題の提示が、やや淡白であったまま、本論の近世・近代の外来語表記における補助符号の精査に進んでしまったこともあり、学位申請者の研究の目指すところが分かりにくくなったところがあったように思われる。

また、「引用・卓立」と纏めた補助符号の機能だが、朱引と同様に、卓立した部分がどのような性格の文字列であるのかを符号の種類によって示す注釈のような機能も有していたことについて、十分に検討出来ていなかった点、また、従来の研究と同様であるのだが、漢字仮名混じり文が持つ分節機能も「卓立」ということの中に含めてしまっている点の検討が不十分であった点、「読解」「読みやすさ」ということの示すところを十分に示していないのも惜しまれる点である。

とはいえ、近世期・近代期において外来語が出て来やすいと見られる書籍群を大量に調査し、この時代に於ける補助符号の展開から、漢字平仮名交じり文に片仮名表記外来語、という形への収斂を具体的に示したことは重要であり、今後の展開も期待出来る。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。